

多様性に配慮したキャンパスづくりに関する基礎的研究

内田果歩、北川愛夏、坂本みのり、中尾瑠希、乾美紀

(乾ゼミ)

はじめに—研究の背景と目的

近年の社会では、異なる背景や特性が個人のアイデンティティとしてみなされ、当たり前にならざるを得ない環境をつくるのが求められている。つまり、個人の性別、障がい、国籍、宗教、文化、性的少数者であることなどにかかわらず、それぞれが特性を活かしながら活躍できる場づくりが必要とされているのである。兵庫県立大学（以下、県立大と記す）でも2021年5月にダイバーシティ推進宣言を発表し、ひとりひとりが持つ能力を最大限に活かし、共創できる環境をつくることを目指されている。キャンパスは社会の縮図でもあるため、当事者が過ごしやすい環境を作り上げることは、多様性を受け入れる人材を育成することにもつながる。

本研究では、ダイバーシティの中でも①多様な性のあり方、②多文化・宗教について取り上げる。そして、それぞれの事例についてどのような現状があるか把握し、どのようにその環境を変えていけば当事者が快適にキャンパスライフを送ることができるかについて明らかにすることを目的とする。

この2つの課題は対象もテーマも異なるため、分けて扱うこととし、まず、第一部では、多様な性のあり方を取り上げ、第二部では多文化・宗教（特にムスリム留学生を）に焦点を当てて研究を進めていく。

第一部 性の多様性に関する研究

1. 研究の背景

近年、メディアや東京オリンピックの影響によって日本におけるLGBTQ+に対する社会的関心が日々拡大している。LGBTQ+とはセクシュアルマイノリティの総称の1つで、次のそれぞれの頭文字をとった単語である。L:lesbian（レズビアン）は女性同性愛者、G:gay（ゲイ）は男性同性愛者、B:bisexual（バイセクシャル）は両性愛者、T:transgender（トランスジェンダー）は身体の性とは異なる性別を生きる人、生きたいと思う人、Q:questioning（クエスチョニング）は性自認や性的指向が定まっていない、意図的に定めていない人を指す。

またLGBTQという言葉だけではくくることができないセクシュアリティが多く存在するため、それらを+と表

記している。トランスジェンダーには出生時の身体の性によってMtF（Male To Female）やTrans woman、FtM（Female To Man）やTrans manという表現も用いられる。

また最近では、性の多様性をアイデンティティと表現する意味を込めて、SOGIという表現が推奨されている。SOGIとは、「Sexual Orientation & Gender Identity（性的指向と性自認）」の頭文字をとったものである。LGBTQ+が性的マイノリティの総称であるのに対し、SOGIは性の要素の尺度を表している。

電通の調査（2020）によると、LGBTQ+層に該当すると回答した人は、2012年の5.2%から2020年には8.9%に増加している。また、クエスチョニング（性自認もしくは性的指向が決められない、分からない）、エックスジェンダー（性自認が男性・女性どちらとも感じる、どちらとも感じない）などといった「LGBT」の他にも多様なセクシュアリティがあるということが明らかになった。

ジェンダー平等を目標とした世界で様々な取り組みがされている一方で、日本におけるLGBTQ+に対する取り組みは遅れをとっていたが、東京オリンピックを機に企業や学校、自治体などでその取り組みが強化されるようになった。しかし、当事者を受け入れる仕組みや設備を整えることだけでは、果たしてLGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりの一環として十分な効果を発揮できているのだろうか。また、これからLGBTQ+に対する取り組みを進めるにあたり、どのようなことから始めていくのがより効果的であるかを再検討する必要があると考える。

2. 研究目的

まず、教育現場におけるLGBTQ+に関する問題点として、非当事者の知識・理解不足や当事者の存在が見えづらくニーズが表面化していないことがあげられている。一方で、LGBTQ+という特性が明らかになることでセクシュアルマイノリティに対して嫌悪感や差別意識が強くなる傾向があると報告されている（釜野、石田、風間、吉仲、河口、2016）。従って、このテーマは大変繊細で慎重に扱うべき問題でもある。

本研究では LGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりの基礎的研究として、①大学生が性の多様性についてどのくらい認知しどのように考えているのか、②当事者と関わる講演会の実施が学生にどのような影響を与えるか、③キャンパス内において性の多様性を普通に受け入れるためにどのような取り組みが必要であるか、について明らかにする。そして、①～③をもとに、LGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりのための効果的な取り組みを検討することを目的とする。

3. 先行研究と本研究との関連

堀江 (2018) は、LGBTQ+の存在が明らかになることで、日本社会において当事者への差別意識がより一層顕在化してきているとし、釜野ら (2016) は、身近なところに存在する性的マイノリティに対して嫌悪感や差別意識が強くなる傾向があると指摘している。

また東 (2018) は、他学生と異なる行動を取らなければならない状況に置かれた LGBTQ+学生が周囲の好奇心にさらされ、それがアウティングに繋がる恐れがあるため、配慮のあり方について検討する必要があると述べている。

以上より、これまでの先行研究では、大学における LGBTQ+に対する取り組みや配慮事例のあり方について現在も模索している最中であることがわかる。

本研究では、大学生の性の多様性に関する意識調査を通し、キャンパス内で LGBTQ+が普通に受け入れられるために、どのような取り組みが必要であるかを検討・実施し、その取り組みによって得られた効果を報告する。

4. 調査方法

第一に、一般的に大学生が性の多様性についてどのくらい認知しどのように考えているのかを明らかにするためにアンケート調査を行った。実施期間は 2021 年 6 月～7 月で、Google Form を使用し、大学生 128 名を対象に実施した。主な質問内容は、①LGBTQ+という言葉とその意味を知っているか、②SOGI という言葉とその意味を知っているか、③自身の大学は LGBTQ+学生に対してどのような環境だと思うかである。

第二に、県立大で実施した 2 回の講演会、「LGBTQ+への理解を深める講演会」と「多様な性のあり方 -SOGI への理解を深める講演会-」の参加者を対象にアンケート調査を行った。これらの講演会は県立大におけるダイバーシティ推進 (特に学生のインクルーシブマインド育成) のプロジェクトの一環として実施された。

質問内容は、①講演会の前後で LGBTQ+に対するイメージにどのような変化があったか、②講演会に参加したことによって性に対する考え方がどのように変化したかである。

第三に、当事者のニーズを明らかにするために、LGBTQ+当事者 3 名を対象にインタビュー調査を行った。このインタビュー調査は、先述した「LGBTQ+への理解を深める講演会」の際に実施したため、講演会内で語られた当事者の声も併せて報告する。

5. 調査結果

まず、第一の調査結果を述べる。質問①より、LGBTQ+について「言葉も意味も理解している」と回答した学生は 92 人で全体の約 72%、「言葉を耳にしたことはあるが、詳しくはわからない」と回答した学生は 33 人で全体の約 26%であった。「知らない、聞いたことがない」と回答した学生は 3 人で全体の約 2%となった。この結果から、約 98%の学生が LGBTQ+という言葉は少なくとも聞いたことがあることがわかり、LGBTQ+という言葉自体の認知度は非常に高いと言える。

質問②より、SOGI について「言葉も意味も理解している」と回答した学生は 16 人で全体の約 13%、「言葉を耳にしたことはあるが、詳しくはわからない」と回答した学生は 23 人で全体の約 18%である。LGBTQ+の認知度が約 98%であるのに対し、SOGI の認知度は約 31%に留まっているのが現状である。「知らない、聞いたことがない」と回答した学生は 88 人で全体の約 69%になり、SOGI についてはまだ非常に認知度が低いと言える。

質問③より、自身の大学が LGBTQ+学生に対してどのような環境だと思うかについては、「どちらでもない」「わからない」という回答が目立った。この回答の理由として、「過ごしやすい環境の具体的なイメージができない。」「あまり興味はない。」という意見が多く見られた。

これらの結果から、多くの大学生は当事者がどのようなことで困っているのか認識しておらず、LGBTQ+の取り組みに対して当事者意識を持っていないことがわかった。

次に、第二の調査結果について述べる。SOGI 啓発方法として、LGBTQ+と SOGI に関する講演会を実施した。講演は特定非営利活動法人 MixRainbow に委託し、当事者 3 名を講師として迎えた。MixRainbow は兵庫県尼崎市を拠点とし、LGBTQ+当事者やその理解者のつながりをつくることの居場所を提供したり、様々な講演会開催してしている。

講演会の概要は表 1 の通りである。どちらの講演会も前半は講義、後半は参加者をグループに分け、当事者を囲み、質問をする形式の座談会を行った。座談会は参加者 1 人あたり 2 人の当事者と話ができるよう、15 分間を 2 回ローテーションする形をとった。そのため、学生は講演会中に抱いた質問を座談会の中で直接当事者に聞くことができた。

表 1 講演会の概要

調査日程	2021年11月16日	2022年1月11日
場所・講演会名	環境人間キャンパス「LGBTQ+への理解を深める講演会」	神戸商科キャンパス「多様な性のあり方—SOGI への理解を深める講演会—」
講師	LGBTQ+当事者3名	LGBTQ+当事者4名
内容	前半	LGBTQ+に関する講義
	後半	当事者(3名)とのグループ座談会
		SOGIに関する講義
		当事者(4名)とのグループ座談会

姫路環境人間キャンパスと神戸商科キャンパスの講演会で異なる点は2つある。まず、神戸商科キャンパスではLGBTQ+だけでなく SOGI に焦点を当てたことである。この理由は、姫路環境人間キャンパスで講演会を行った後に、学生が SOGI の考えを尊重したいという感想を述べた者が多かったためである。次に、講師である当事者を多く招くことができたことである。グループ座談会の際、環境人間キャンパスでは当事者1名あたりの参加者数が10名前後であったが、神戸商科キャンパスでは7名前後に減ったため、少人数で非常に近い距離で座談会を開くことができた。

(1) LGBTQ+に対するイメージの変化

講演会の参加者に、講演会前と講演会後で「LGBTQ+に対するイメージ」を単語(名詞や形容詞)で回答してもらった。その結果をテキストマイニングで分析し、講演会前後でLGBTQ+に対するイメージがどのように変化しているのかを明らかにした。テキストマイニングの結果は図1のとおりである。

講演会前のLGBTQ+に対するイメージでは、姫路環境人間キャンパスと神戸商科キャンパスの両方で“少数・少数派・マイノリティ”(18件)“珍しい”(14件)“差別”(5件)“難しい”(4件)などの同じようなネガティブなワードが目立っていた。しかし、講演会後と比較してみると2つのキャンパスで異なる結果が得られていることがわかる。

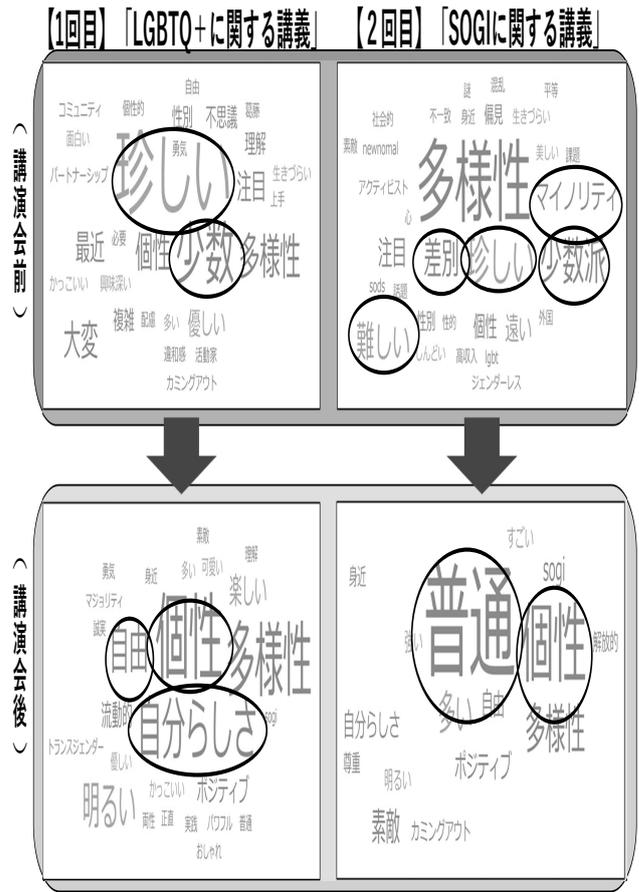


図 1 LGBTQ+に対するイメージの変化(筆者作成)

姫路環境人間キャンパスでの「LGBTQ+」に焦点を当てた講演会の後では、“個性”(7件)“自分らしさ”(5件)“自由”(4件)といった言葉が多く、LGBTQ+に対するイメージがネガティブなものからポジティブなものに変化したことを読み取ることができる。一方で、神戸商科キャンパスでの「SOGI」に焦点を当てた講演会の後では、“普通”(6件)という言葉が1番多く見られ、次に“個性”(5件)“多様性”(4件)と続いた。“普通”が最も多かった理由として、SOGIを強調したことで、参加者に当事者意識が芽生え、「LGBTQ+も普通のことなんだ。」という意識が芽生えた結果だと考えられる。

2つの講演会の比較から、誰もが多様な性の当事者であることを啓発し、セクシュアルマイノリティへの嫌悪感や差別意識を抑制するためには、LGBTQ+だけではなく、SOGIにも焦点を当てた講演会を行うことが非常に効果的であることがわかった。

(2) 当事者へのインタビュー

当事者3名へのインタビューの結果、いずれも啓発活動として講演会を実施することは必要であるとされた。例えば、定期的に講演会を実施している学校では、カミン

グアウトに抵抗のない学生が多く、廊下や教室などで他の話題と同じように自身のセクシュアリティの話をしているという (Bさん、Cさん談)。一方で、セクシュアリティの悩みを共有することができる仲間がいなかったことで、息苦しさを感ずる学生生活を送った経験のある当事者もいた (Aさん談)。インタビューで語られた話の中で、学校生活に関連するものについて以下に引用する。

「高校まではセクシュアリティに関する悩みを人に打ち明けることができなかった。大学では、もっと同じような仲間がいるのではないかと期待があったが、それまでと同じようにセクシュアリティについてオープンにしている人や LGBTQ+に理解のあるように見える人もおらず、とても悲しかった。」 (Aさん、Xジェンダー)

「自分は生まれたときから女性だと思っていた。学生生活では、身体の性と心の性が違うことを周りが受け入れて認めてくれていたので、更衣や体育の授業などは女性として受けられていた。

(Cさん、トランスジェンダーMtF)

AさんとCさんの話を比較すると、学校生活という限られた空間の中で、周りの理解があるかないかでは過ごしやすさに大きな違いがあることがわかった。

「重要なのは、当事者の居場所をつくることだと思う。例えば学生がアライ (LGBTQ+の理解者の名称) であることを公言したり、サークル活動で同じ思いを持つ学生を集めたりすることで、当事者の声も届くようになり、その声がかきかけで設備や制度が整っていくのではないか。匿名のアンケートボックスなどを設置し、隠れた当事者の声を聞くことも効果的だと思う。」

(Bさん、トランスジェンダーFtM)

「LGBTQ+という言葉で特別視するよりも、やはり SOGI の概念に基づいてみんなが当事者意識を持ってくれると、当事者と非当事者の双方が共に過ごしやすくなるのではないか。」

(Aさん、Xジェンダー)

インタビューの結果から、キャンパス内における当事者にとってのニーズは「理解者の存在」と「居場所」であることがわかった。学生にとって学校という場所は、家の次に大きな生活空間となるため、そこでの過ごしやすさを追究することは非常に重要である。

6. 考察

ここで、本研究の目的である①大学生が性の多様性についてどのくらい認知しどのように考えているのか、②キャンパス内における LGBTQ+を自然に受け入れるためにはどのような取り組みが必要であるか、③その取り組みが学生に与える影響について明らかにしたうえで、LGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりのための効果的な取り組みを検討することについて、アンケート調査とインタビュー調査の結果をもとに考察する。

第一に、アンケート調査では、大学生の LGBTQ+に関する認知度は高く、当事者に対して肯定的な考えを持っているが、SOGI に関する認知度は低く、当事者に対して「珍しい」「少数」「難しい」のような“自分とは違う存在”というイメージを持っていることが分かった。しかし、当事者へのインタビュー調査では、自分のセクシュアリティを受け入れてもらえる居場所が不足しているということが明らかになり、肯定的な考えを持つ大学生が大多数であるにもかかわらず、学校生活で自分のことを受け入れてもらえない当事者が多い、理解してもらえないかわからないためカミングアウトすることができないという相反する結果になった。これは、先行研究でも述べたように、身近なところに存在するセクシュアルマイノリティに対して嫌悪感や差別意識が強くなる傾向があることと、アンケート調査で明らかになった当事者意識のなさが関係しているのではないかと考えられる。

第二に、当事者による SOGI に焦点を当てた講演会や交流会を実施することが、参加者の性に対する当事者意識を芽生えさせるために効果的であることがわかった。図 1 から分かるように、LGBTQ+だけよりも SOGI についても強調することで、当事者へのイメージが“LGBTQ+の人”から“普通の人”へと変化した様子が見られた。この理由は、SOGI というすべての人に該当する概念への理解を通して、自分の性も多様に存在する性の中の 1 つであるという意識が生まれたからではないかと考えられる。

最後に、大学生への性の多様性に関する意識調査や、講演会の取り組み、当事者へのインタビューをもとに、LGBTQ+フレンドリーなキャンパスづくりのためにはどのような取り組みを行うことが効果的であるか結論を述べたい。① SOGI に関する啓発活動を行い、多様な性=“普通”であるという印象をつける。②理解者であることを示し、当事者の居場所づくりを行う。③隠れた当事者の声に耳を傾け、当事者のニーズを表面化させる。これらを継続的に行うことで、LGBTQ+の存在が明らかになっても、当事者と非当事者の双方が過ごしやすいくキャンパスづくりに繋がっていくのではないだろうか。

第二部 多文化・宗教に関する研究

1. 研究の背景

2008年1月に発表された「留学生30万人計画」は、2019年5月1日に外国人留学生が312,214人となったことで、計画を1年前倒しする形で達成された。図1は在日留学生数の推移新型を表したものである。

コロナウイルスの影響を受け2019年度からは留学生数が減少したが、計画が発表された2008年と2020年を比較すると123,829人から279,597人へと大幅に増加している。そのなかでインドネシアやバングラデシュ等のイスラム教を信仰するムスリム(イスラム教徒)留学生も増加している(日本学生支援機構2020)。留学生数全体の増加に伴い、ムスリム留学生も増えつつある一方、日本人にとってムスリムは馴染みの浅い小集団という面も否めない。ムスリムはイスラムの教えに基づいた価値観や守るべきとされる行動様式を持ち、礼拝や断食の週間、身体の露出や食事、婚前の男女交際の制約等がある(中野ら, 2019)。そのため、社会文化的にムスリムへの対応が必要となってきた。

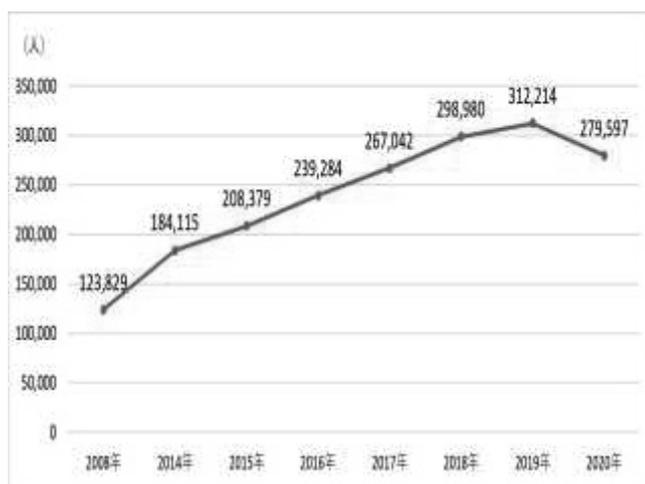


図1 在日留学生数の推移(各年5月1日現在)(独立行政法人日本学生支援機構2020)

2. 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つ目はムスリム留学生が学生生活を送る上でどのような問題を抱えており、どのような対応が有効であるのかを明らかにすることである。2つ目は、県立大がムスリム留学生に対してどのような宗教的配慮を行い、その対応がどの程度認知・利用されているかを調査し、留学生少数在籍校ならではの立場からどのように宗教的配慮を行っていけば良いのか考察することである。

3. 先行研究

(1) イスラム教の宗教上の戒律と生活習慣

ムスリム留学生が信仰するイスラム教は唯一神アッラーへの絶対的服従を意味する宗教であり、彼らが宗教上守るべきとされる行動様式については、唯一神アッラーへの絶対的服従から始まる。食事については、豚肉、豚由来の原料や食品添加物、アルコールなど口にしてはならない食品があるだけでなく、イスラム教の儀式に則った過程で処理されていない鶏肉及び牛肉、両生類の飲食も禁じられている。断食はラマダーンと呼ばれ、イスラム暦第9月に約30日間、夜明けから日の入りまで断食・斎戒をする。礼拝は、1日5回、メッカの方向に向かって行う。中でも金曜の礼拝はイスラム教徒(特に成人男性)にとって特別なものであり、集団礼拝を行う。礼拝前には手・口・鼻・顔・腕・髪の一部、足を清潔な水で洗浄(=ウドゥ)するため、モスク等には洗浄のための場所が設けられている。このように、ムスリムたちには日本人とは異なり、日常生活を送る上で守るべき戒律が多く存在していることがわかる。

(2) 留学生が抱える問題

大西(2012)は留学生の受け入れが進む留学生数2,872人の国立大学法人を事例として取り上げ、留学生支援上のような課題が生じているのか調べた。そのうち留学生からの相談について、「日常生活に関する相談」や「進路・就職に関する相談」、「心身健康」や「対人関係」に関する相談等は増加が続いていると述べた。留学生には日本人学生と共通する問題がある一方で、言語や文化への慣れが必要であることなど留学生特有のストレスがあることが指摘されている。

(3) ムスリム留学生に対する宗教的配慮の格差

園田(2012)は、留学生を多く受け入れている大規模校や都市部の有名大学に対し、留学生数の多くない大学では、一律に削減されていく予算配分の中、留学生支援サービスに格差が生じることを懸念している。さらに、複数のキャンパスが分離している大学では、もともと少ない留学生支援のリソースが分散され十分な支援を行えないことも考えられると主張している。ムスリム留学生が多く在籍する大学では、ハラールフードの導入や、礼拝のための施設の設置、トイレに祈禱前用の洗浄の設置など、設備的な支援や宗教的配慮がなされている。これらをふまえて、留学生少数在籍校において、ムスリム留学生がより過ごしやすいキャンパスを目指すにはどのようにすれば良いか検討する。

4. 調査方法

研究方法はアンケート調査とインタビュー調査を用いる。調査は2段階に分けて行った。

(1) 調査の対象者

第1調査では、2021年8月、県立大の留学生20名（国際商経学部16名、工学部2名、工学部研究科1名、環境人間学部研究科1名）に対し、来日後に抱える問題を調査した。第2調査では、ムスリム留学生を対象を絞り、彼らの抱えている問題や県立大が行っているサポートの効果を調査することにした。2021年11月に書写工学キャンパスで4名、神戸商科キャンパスで9名のムスリム留学生を対象としてアンケート調査を実施した。

(2) 調査内容

第1調査では、留学生は言語の取得や文化の適応において留学生特有のストレスや困難を抱えていることが判明した。その中でも、先行研究で留学生の抱える問題としてストレス値が高かった「経済問題」「言語の問題」「コミュニティ作り」「学習、研究へのストレス」「日常生活に関する問題」「進路、就職に関する問題」の5つの項目について、どの項目が特に問題となっているか国籍を問わずアンケート調査を行った。第2調査内容では、第1調査で行ったアンケート結果をもとに、食に関する対応と礼拝に関する対応について、県立大のムスリム留学生が抱える問題を調査した。

5. 調査結果

第1調査の結果において、先行研究で挙げられた、留学生の抱える問題としてストレス値が高かった5つの項目のうち、県立大の留学生が抱える問題は特に「言語の問題」「日常生活に関する問題」「進路、就職に関する問題」が挙げられた。その中でも「日常生活に関する問題」として、ムスリム留学生数名からハラールフードが食堂にないことを問題視しているという意見が出されており、ムスリム以外の学生（キリスト教徒・ヒンドゥー教徒）からは、宗教に配慮してほしいとの意見は得られなかった。この第1調査の結果を踏まえ、第2調査として宗教的配慮が必要とされるムスリム留学生を対象を絞り、彼らの抱えている問題や大学が行っているサポートの効果を調査することにした。

第2調査のアンケートから明らかになった結果について、最も多く意見が挙げられた「飲食の制限による困難」と「礼拝習慣による困難」の2つを中心に述べていく。

(1) 飲食の制限による困難

まず、「大学で食べられるものは少ないと感じているか」の項目において、工学・商科キャンパスともに、ムスリム留学生の50%以上が大学で食べられるものが少ないと回

答した。また、約50%のムスリム留学生が「学校外においてのハラールフードの入手」を困難に感じていることが明らかになった。信仰上食べられるものに制限があるムスリム留学生は、生活を送る上でハラールの食品しか口に入れることを許されておらず、飲食の制限による不自由さは留学生へのインタビューの中でも特に苦勞している困難であった。本大学の学生食堂には、ハラールフードは導入されておらず、工学・商科両キャンパスの学生は主に自炊を行い、学食を利用する際も米や魚、卵、野菜のメニューを選んで食事している。本来は厳密にハラームに触れた調理器具や食器、揚げ物油などを避けなければならないが、そうすると食べるものがなくなってしまうので仕方が無いという意見が挙げられた。どちらのキャンパスでも留学生からハラールフードの導入を望む声があがっている。実際に、本大学のムスリム留学生は、業務スーパーやオンラインショップにてハラールフードを購入している。近くにハラールフードを専門的に取り扱う店がなく不便だという声も多く挙げられている。食堂にハラールフードがない一方、商科キャンパスの生協ショップ内で一部ハラールフードを取り扱っていた。お菓子（クッキー）2種類と麺1種類と数は少ないものの、自炊できなかった時や昼食に利用できる。しかし、ハラールフードがないと思えば生協ショップを利用しないため、そのハラールフードの存在に気がついていないムスリム留学生もいるため、販売促進のためにも積極的に情報を流す必要があると感じた。

(2) 礼拝習慣による困難

まず、「キャンパス内に礼拝所があることを知っているか？」の質問において、回答者全員が、礼拝のための教室を認識していた。次に、「礼拝所の設備の満足度」については、工学キャンパスにおいて「かなり満足している」が一番多く、全体的に礼拝所の設備に満足していた。一方で、商科キャンパスでは、「満足している」「していない」どちらも同程度の回答であった。しかし、「あまり満足していない」と回答した3名のうち2名が女性であり、「満足している」と答えた3名のうち2名は男性であり、回答に性別による差が見られた。その理由として、男女の仕切りがなく準備する際などに不便であるとの意見が挙げられていた。

工学キャンパスには、ムスリム留学生（マレーシア6名）のための部屋があり、そこを礼拝のための場所として活用していた。部屋の中には絨毯が敷かれており、男女の区切りをつけるためのカーテンも備わっていた。ウドゥは部屋の中の手洗い場またはトイレで行っており、トイレには特別な洗い場等はなかった。



図2. 工学キャンパス礼拝室
(左：内観 右：礼拝の様子) (筆者撮影)

商科キャンパスでは、教育棟Ⅰの401教室を礼拝のために利用している。金曜日はムスリムにとって特別な礼拝日であるため、金曜日のランチタイムにこの礼拝室を利用する留学生が最も多い。一方、大学内に寮があり距離が近いので、入寮している留学生に限るが礼拝室ではなく寮でお祈りをする留学生も多い。普段は机が中央に並べられており、礼拝の際は机を端に避ける。1人が大きな敷物を持参してその上で行っていた。図3で明らかであるように、机を男女の仕切り代わりとして礼拝していた。インタビュー実施日に礼拝室に集まっていたムスリム留学生の全員が、「男女の仕切りを作るパーテーションが欲しい」と回答した。また、ウドゥはトイレで行い、特別な洗い場は設備されていない。



図3. 商科キャンパス 礼拝室 (筆者撮影)
(左：通常時の内観 右：礼拝時の内観)

6. 考察

本研究の目的の1つ目は、ムスリム留学生が学生生活を送る上でどのような問題を抱えており、どのような対応が有効であるのか明らかしたうえで、大学がムスリム留学生に対してどのような宗教的配慮を行っているかに

ついて調査することであった。

アンケート調査やインタビューにより、県立大のムスリム留学生が抱える問題は、食の制限による困難と礼拝習慣に関する困難が大きいことがわかった。これらの結果から、ムスリム留学生がかかえる問題として解決していくべき主な問題は飲食の制限による困難と礼拝習慣に関する困難ではないかと考察する。その他のアンケート結果において、行動上の制約による困難としてムスリムの女性がスカーフ(ヒジャブ)姿で生活する上で周りの目を気にしている節も見られた。一括りにムスリム留学生といえども、個人によってどの程度イスラム教の教えを守るかの度合いが違っており、その差によってムスリム留学生が日本で生活していく上でのハードルがかなり異なってくると考える。

本研究の目的の2つ目は、県立大がムスリム留学生に行っている対応がどの程度認知され、どの程度有効に利用されているかを調査し、留学生の多い大学に比べ留学生少数在籍校ならではの立場からどのように宗教的配慮を行っていけば良いのか考えることであった。

県立大(書写工学キャンパス・神戸商科キャンパス)が行っているムスリム留学生への宗教的な配慮として、礼拝ができる場所の確保、ハラールフードの販売(商科キャンパス生協ショップの一部)が利用されていることがわかった。

礼拝のための場所は工学・商科キャンパスどちらもムスリム留学生に認知されており、活用されていた。しかし、ムスリム留学生数が6名である工学キャンパスはムスリム留学生のための礼拝の部屋(マレーシア留学生居室)が確立されていたにもかかわらず、17名ムスリム留学生が在籍する商科キャンパスの礼拝室の方が空き教室を利用していたり設備が整っていなかったりと更なる配慮が必要であるように思われた。工学キャンパスでは少数のムスリム留学生のために礼拝部屋等の設備が充実していることをふまえると、留学生数が少なくとも大学の支援によって宗教的配慮を行うことは可能であると考えられる。また、筆者らはムスリム留学生の数が少ないからこそ、留学生でまとまった意見を調査しやすいのではないかと考える。園田(2012)は、留学生少数在籍校では留学生数が少ないからこそ1人ひとりの留学生のニーズに応じた対応ができると延べている。留学生に関わる局所の人数が少ないため、事務組織と教員組織が密接に連携し、柔軟に支援に当たっていけるのではないだろうか。

また、ムスリム留学生の飲食への問題は未だ宗教的配慮が十分ではない。食堂や生協の販売店でハラールフードのメニューがない(特に工学キャンパス)ことにより、

仕方なくハラームを口にせざるを得ない状況となっている。この問題は改善されてゆくべきだと考える。食事に関する問題を大学で解決するためにハラールメニューの充実が求められるが、調理場や食材、採算の問題から食堂を改善してハラールメニューを多く取りそろえたり、ムスリム留学生のために別の調理器具等を用意したりすることは難しい。留学生が多い大学ではハラールフードの提供やムスリム留学生への配慮(食器等を分ける、ハラールの表示を付けるなど)を行っていた。しかし県立大のように留学生数が少なく、それに伴ってムスリム留学生も未だ少ない大学では限度がある。そのため、ハラールのお弁当やパンなど生協の購買部で徐々にハラールフードを増やしていくことが望ましい。

宗教的な配慮に対して、「特定の宗教を優遇することはできない」という公平性の問題があるのかもしれないが、第1調査のアンケートではムスリム留学生以外に宗教的な配慮を必要とする声は見られなかった。ムスリムの宗教的戒律は日常生活に溶け込んでおり、誰もが快適にキャンパスライフを過ごすためにはその日常に配慮した対策が必要であると考え。中野ら(2015)が指摘するように、ムスリムが留学先の環境に合わせて問題を克服しながら社会生活をこなしていくことは重要な課題であるが、日本人側がムスリムに理解を示したり配慮したりする必要がある。ムスリム留学生の人数や予算の都合なども考えられるため、今すぐ大学の施設や設備を改善するのではなく、今後も増えゆく留学生のためにできる支援を考える必要があるのである。今後留学生数が増加していくことを念頭に、それに伴った宗教的配慮を行うことで大学のアピールポイントにもなり、留学生もより過ごしやすくなるのではないかと考える。

おわりに—多様性に配慮した環境づくりに向けて

本研究では、多様な性および宗教を事例として取り上げ、当事者のニーズに根差した見解を調査し、提言を行ったが、他にも障がいを持つ学生、見えない特性を持つ学生など多様な背景について配慮する必要がある。今後はさらに対象を広げ、悩みを持つ当事者が過ごしやすいキャンパスづくりにつながる研究を続けていきたい。

参考文献 第一部

- 東優子(2018)「今、教育現場で LGBT の子どもたちは：SOGI/E の多様性と学校教育」『教育心理学年報』第 57 号、pp. 295-297.
- 加藤悠二(2018)「今、教育現場で LGBT の子どもたちは：大学における LGBT 学生支援」『教育心理学年報』第 57 号、pp. 291-292.

釜野さおり、石田仁、風間孝、吉仲崇、河口和也(2016)『性的マイノリティについての意識—2015 年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ(研究代表者 河口和也)編 pp. 95-147.

- 日本学術会議(2017)「性的マイノリティの権利保障をめざして—婚姻・教育・労働を中心に—」pp. 17-22.
- 日高庸晴(2014)「LGBT 学生の存在を考える—キャンパス内でのダイバーシティ推進のために」『日本私立大学連盟大学時報』第 63 巻 358 号、pp. 76-83.
- 堀江有里(2018)「今、教育現場で LGBT の子どもたちは：異性愛主義と性別二元論が生み出す差別—排除の主体は誰なのか」『教育心理学年報』第 57 号、pp. 292-293.
- 「電通 LGBTQ+調査(2020)」
(<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html>) (2021年5月2日アクセス)

参考文献 第二部

- 大西晶子(2012)「大規模な留学生受け入れを行う大学における留学生支援」『コミュニティ心理学研究』第 16 巻 1 号、pp. 27-38.
- 園田智子(2012)「分離型キャンパスにおける留学生支援とリソース分散するコミュニティとその対策—」『コミュニティ心理学研究』第 16 巻 1 号、pp. 17-26.
- 中野祥子・奥西有理・田中共子(2015)「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学院社会文化科学研究紀要』第 39 号、pp. 137-151.
- 中野祥子・田中共子(2019)「ムスリム留学生との交流のために—調査・実戦研究から見てきた日本的共同性の視点—」『留学交流』7月号 vol. 100、pp. 32-43.

引用・参考 URL

- 「文部科学省 留学生 30 万人計画骨子の策定について」
(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.html) (2021年6月1日アクセス)
- 「2020 年度 外国人留学生在籍状況調査結果」
(<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zai-seki/data/2020.html>) (2021年6月3日アクセス)